

富士山と万葉集を中心とした文学

はじめに

わたしたちのふるさとにある富士山は、信仰や芸術に大きな影響を与えたとして、平成 25 年 6 月に世界遺産(文化遺産)として登録され、6 周年を迎えました。

本年度は富士山世界遺産登録 6 周年を記念し、「富士山と万葉集を中心とした文学」をテーマとして、古来より人々が富士山に対して何を感じ、どのように表現してきたのかについて、迫ってみます。

『万葉集』(まんようしゅう)は、奈良時代末期に成立したとみられる、日本に現存する最古の和歌集です。天皇、貴族から下級官人、^{きまもり}防人、農民など、さまざまな幅広い身分の人々が詠んだ歌を、四五〇〇首以上も集めたものです。

万葉仮名(まんようがな)は、主として上代で日本語を表記するため、漢字の音を借用して用いられた文字のことです。『万葉集』での表記に代表されるため、この名前があります。

※展示の記述については、主に都留文科大学・鈴木武晴教授の『テーマ別万葉集』、伊藤博氏の『萬葉集釈注』、『萬葉集全注』などを参照しました。

万葉集 卷3 三一八 山部赤人

万葉集には、富士山を詠んだ歌が何首かありますが、山部赤人の三一七番の長歌に続く、下記の反歌が有名です。

田子の浦^{ふじ}ゆうち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける

【現代語訳】

田子の浦を通して視界の開けた場所に出て見ると、おお、真っ白に富士山の高い嶺に雪が降り積もっている。

【原文】

田兒之浦徒 打出而見者 真白衣 不盡能高嶺尔 雪波零家留

山部赤人は、柿本人麻呂を継承した、聖武朝の宮廷歌人です。長歌では富士山を「振り放け見」で詠んでいますが、反歌では田子の浦を通して富士の見えるところに出て詠んでいます。

反歌の詠歌地点については諸説ありますが、薩埵峠の中腹からの眺望とも言われています。

百人一首でも有名な、

「田子の浦にうち出でて見れば

白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」は、

『新古今和歌集』にも収録されています。

「白妙の」は赤人の歌の「真白にぞ」の原文表記

「真白衣」によって導かれたものと考えられます。



絵：大森明恍「田子の浦」